
恋の隠し場所

バックハイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋の隠し場所

【著者名】

バックハイ

N4306E

【あらすじ】

一年ぶりに出来た彼女に三日で振られた智博。そんな智博と元力ノ由恵が巻き起こすはちゃめちな恋愛。前作「僕の宝物」の続編となつてますが、主人公が変わったので初めての方でも楽しめると思います。智博を主役にしたのでコメディー要素が強くなつてしましました。

第1話（前書き）

安易な考え方で智博と由恵をくつつけてしましました。
と思いますが応援よろしくお願いします。

贊否両論ある

第1話

「何それ…？本当、トモは最低…」『…』 もう別れる…

俺は、そう言つて席を立つ彼女の後ろ姿を眺めていた。
追い掛ける気になんて更々ならない。

女はいつもそうだ。

勝手でわがままで…

俺の名前は林田智博

チャームポイントはつぶらな瞳と大きな口。

好きなタイプは可愛い女の子。

基本は来る者拒まず、去る者追わず。

そんな俺だけど、付き合つて二三日の彼女が…さつきまではいた。
まあ、すでに振られて彼女はどこかに行つてしまつたが…。

…ひょくへひ…

…一年ぶりの彼女だったのに…

…まだキスすらしていないのに…

それが今の本音。

俺は一人、ファミレスに取り残された。

テーブルのジュースを一口飲むと、伝票を手にレジへと向かう。

…ちくしょう…

やり切れない思いを吐き出せないまま外に出る。

彼女との付き合いは…
元々ノリだった。

俺の親友

長谷部誠…通称マコ

山崎竜輝…通称タツ

三人で行つた合コンが彼女との出会いとなる。

その日来た女の子、藤井美咲は高校の頃から有名な超美人。

…なのだが…何故かマコが彼女のハートを射止め、二人はいい雰囲
気に。

未だに一人が付き合つているのかどうかは謎だが…

二人はいつも一緒に居る。

次に、その日のメンバー千葉元子。
ショートカットのギャル系。元子はいつもサバサバしていて気持ち
がいい。

元子はその後すぐにタツと付き合い始め、今は妊娠三ヶ月目。
来月入籍するらしい。

そして最後に平田由恵…。小さくて、ほんわかした可愛い系。
…だと思ってたのに…。

先程、俺に罵声を浴びせ置き去りにした張本人…。

美咲とマコはいい感じだし、元子とタツは来月入籍。

…俺達も付き合っちゃおつか?

と、ノリで言つてみたのが三日前の出来事だった。

すると意外に、由恵からの返事はOK…。

めでたく付き合い始めたのだが…。

「…トモ、今の言い方マコっぽい!」

楽しそうに話す由恵。

しかし、俺は面白くない。

何故か？

一緒に居ても、三回に一度はマコの名前を出す由恵。

…元々、由恵はマコが好きだったんだ。

俺も最初は、そんな事気にも留めなかった。

…でも、付き合い始めてからも電話も会議も

マコマコマコマコ…

もう、流石の俺も喉の奥が
「イーッ…」ってなって

「そんなにマコが良いなら、マコに会ふば？…元々俺達が付き合つたのだつて、ノリなんだし。」

…って言つてやつた！

由恵はそれを聞くと解りやすい程に涙を溜めて、俺に罵声を浴

びせて出て行つた。

…ふんっ！勝手にしゃがれ！

…罪悪感？そんな物ないね

大体、由恵だつて俺を好きな訳じやない。
単に寂しかつただけだろ？

たまたま側に居たのが俺だつた。
それだけの事。

「ただいま！」

俺は自分の家へと戻ると、ぶつせりぱりぱり言つた。

…しかし…

玄関先に並んである小さな鞄に目が止まる。

俺はそのままリビングへと足を進める。

…ガラッ…

ドアを開けるとやうに居たのは、姉ちゃんと由恵。

…さつき別れるって言つて、俺を置き去りにしたくせに…

…何呑氣に入んちでリラックスしてんだよ…

「智博！ほりお密さんなんだからお茶いれて！」

姉ちゃんが俺を見るなり、大きな声でそう言つた。

俺は無視してリビングの外へ足を向ける。

…ボゴツ！

…痛い…

突然、後頭部に何かか飛んで来た。

俺は足元を見る。

…スリッパ…

…しかし俺の後頭部にスリッパが飛んで来る事なんて日常茶飯事。

俺は冷静に、スリッパを無視して足を進める。

…ボゴツ…

…一個目のスリッパが後頭部に直撃する…

…流石の俺も一個は我慢出来ない…

…振り向き、姉ちゃんに文句を…

…ボーッ…

…三個目のスリッパが俺の額を直撃した…

そして俺の視線の先には、

四個目のスリッパを手にして今にも投げ付けてきそうな由恵の姿が…

…。

…「の野郎…

俺は無言で由恵を睨み付けた、台所へと足を向けた。

もちろんお茶を入れる為に

「…ひつどーい！そんな酷い男が居る訳！？」

姉ちゃんのわざとらしい声がリビングから聞こえて来る。

「有り得ないですよね！しかも謝りもしないんですよー！」

由恵もわざと大きな声で言つてゐる…。

…大体、何であの二人があんなに仲良くなつてるんだよ。

由恵は付き合つ前から俺の家には何度も来ていた。

しかし、俺の家族は由恵を俺の彼女だと勘違いし、由恵と家族の一員の様に仲良くなり始めた。

特に姉ちゃんは由恵の様な妹が欲しかつたらしく、一段と仲良くなつていた。

休みの日なんて一緒に買い物に行つたりもしていた。

…なので、俺と由恵の付き合いを一番喜んでいたのは姉ちゃんだった…。

「本当最低！そんな男別れて正解だよー」

俺がお茶を持って行くと、姉ちゃんはソファーに踏ん反り返り、大

そんな声でわざわざ言った。

……バカヤロウ……

「やせっぱつぱりですかねーもひ、綺麗れっぱり忘れましたけどねー。」

由恵も俺を無視して話を進める。

……お前なんてマジホタクなべせこ……

……。

俺はテーブルにお茶を置くと、退散するためリビングの外へと足を……。

……ガチャヤ！

俺がドアノブに手をかけるよりも早く、ドアが開く。

「あーーー由恵ちゃん来てたの？今お菓子出すから待ってね。」

そつ、満面の笑みで入って来たのは……

母ちゃん

「あつ！ こんにちは。お邪魔してました。」

由恵はもう軽い立腹を立つて、即ちやんと匂かいとペドラの頭を下げた。

母ちゃんはそんな曲恵を見ると嬉しそうに―――――♪ながら

あらやな……そんなに改まるなにして

と喜んでいたから姉ちゃんの隣に腰掛けた。

すると姉ちゃんは俺の方をちらりと見てから

ねえ、聞いてよ！由恵ちゃん黒鹿な彼田と別れたらしいよ！」

二〇四

…母ちゃんにまで言ひなよ

もちろん、母ちゃんは驚いた様子で俺を睨みつけた。

■ ■ ■ ■ ■ ○

「由惠！」

俺は慌てて由恵の手を引き、自分の部屋へと駆け込む。

…最悪だ…

絶対、今日の夕飯俺の分だけ抜かれてる…

…きっとこれから三日位は家族総出で俺を無視するんだ…

…。

俺はむづりつと由恵を見る。

由恵はベットに腰掛けると、一瞬俺を見ていた。

第2話

「大体、さつき別れるって言つたくせに何で俺の家に居るんだよー。」

俺は由恵を睨みながらそう言った。

「だつて、付き合つた時に一番最初に報告したのお姉さんだし！別れた事も一番最初に報告しなきや！」

由恵はそっぽを向きながらそう答えた。

「大体、由恵がマコマコマコマコマコー…って煩いのが原因なのに、何で俺が悪者なんだよー。」

俺は、こっちを向かない由恵の横顔を睨みながらも続けた。

由恵はその言葉を聞くなり、顔をこちらに向けて俺を睨み付けながら

「そんなにマコマコ言つてないよ！大体、ノリで付き合つた彼氏なんかにそこまで言われたくないしー。」

と言つた。

…むかつく…

…何だよそれ…ノリで付き合つたのは自分も一緒にだろう?

「大体、まだ俺よりもマコが好きなくせに自分を正当化するじゃねーよ!」

俺は少し声を荒げてそう言った。

…田中恵の顔色がみるみる変わる…

…しまった…少し前に過ぎたか…

「…ナニだよー…アホなんかよつもマコの方が何倍も大好きー…悪いー…」

田中恵も声を荒げてそう返した。

…。

…むかつく…

…むかつく…

少しでもここに過ぎた事を後悔した俺が馬鹿だった!

… もういい…

そのままでもいいなら…

「わかったよ！ そんなにマコが好きなら協力してやるよ！」

俺の言葉に、由恵は驚いて俺を見つめる。

「… 何それ… 大体マコには美咲が…」

「俺の予想ではあの一人はまだ付き合ってない… おそらく特別な進展もしない！」

俺は由恵の言葉を遮りて断言した。

由恵は困ったように俯くと

「… でも…」

と呟いた。

俺はそんな由恵をちらりと見てから言葉を続ける。

「… その代わり… 由恵も協力しろよな！ 俺と美咲の事！」

俺の言葉に由恵は顔を上げて睨みつける

「何それ！？自分が美咲どうにかなりたいだけ！？大体、まだ美咲と付き合おうなんて思ってたの！？」

と、声を荒げた。

俺はそんな由恵をちらりと見てからため息をつく。

…馬鹿だな…

俺が美咲と付き合いたいと思つてるかつて？

そんなの…

「当たり前じゃないか！マジ、美咲みたいな超美人いつだって付き合いたいに決まってるだろ？」

俺の言葉に由恵は押し黙る。

…もちろんこの言葉は本心だ！

ただ、一つ補足を付けるなら…

美咲とは付き合いたいとは思うけど、親友の好きな人に手を出すつもりはさらさらない！

…でも、さうでも言わないと由恵は踏ん切りをつけないだろう。

…これ以上ママの影を引きずる由恵を見るのが嫌だったんだ。

由恵はしばらく俯いていたが、顔を上げると

「…分かった！トモと美咲の事、協力する！」

と言つてガツツポーズをして見せた。

それから俺は引き出しからペンとノートを取り出した。

「よし！作戦会議開始だ！」

俺の言葉に由恵も大きく頷いた。

第3話

「…ねえトモ、本当に大丈夫なの？」

由恵が後部座席から運転席を覗き込んで聞いてきた。

あれから一週間後の週末…

俺と由恵は作戦を実行する為に出掛けていた。
もちろんこれからマコと美咲を迎えて行くのだ。

「大丈夫！任せなさい！」

俺は笑顔でルームミラーに写る由恵に言葉をかけた。
マコと美咲は、三日間だけだが俺と由恵が付き合っていた事を知らない。

つまり、作戦を実行するのにとっても好都合だ！

第一の作戦…

まずは美咲を助手席に乗せる。

…つまりは後部座席に由恵とマコを隣同士に乗せる為だ。そこで、

由恵はマコに猛烈なアプローチ。

勿論、美咲は気が気じやないはずだ…。

俺は車を待ち合わせの駅前へと走らせる。

マコと美咲はすでに来ていた。

…一人で楽しそうに話をしている…

…ちくしょ、…マコばっかり…

俺は車の中から一人を睨み、車を路肩に寄せて停車した。

…すぐに運転席から外にする。

ここからはタツ仕込みのテクニックで美咲を助手席へ誘導…

…。

…するはずが…

俺が外に出て、誘導する前に助手席に乗り込みシートベルトを付け始めるマコ…

美咲も楽しそうに話しながら後部座席に乗り込んだ後だった。

一人、車の外に取り残された俺。

…マコが不思議そうに俺を見つめている。

…バカヤロウ

…しようがないので、そのまま運転席に戻る事にした。

…由恵の冷たい視線が心を傷める

「どうしたんだ？トイレでも行きたかったのか？」

車に乗り込むと、マコが不思議そうに尋ねてきた。

俺は

「…外の空気が吸いたかっただけだよ」

と、小さく呟くので精一杯だった。

…しかし…

こんな事でくじけるトモくんじゃない！

作戦はまだまだある！

俺達は予定通りに、車で一時間程にある水族館へとやつて來た。

第一の作戦…

それは題して…

「トモくん、美咲と迷子ーの巻き」である。

今日は週末…水族館は予想通りに入込みだ！
俺達は入館する際の人込みに飲まれて行く。

…チャーンス！

俺はどうさくさに紛れて美咲の手を引く。
そのまま人の波に流される。

「マコ」と美咲は遙か後方に…

…

……？

「マコと美咲が遙か後方に？」

俺は慌てて掴んだ手の主を見る。
その先には……

「……馬鹿……」

……大きくため息を付く由恵がいた。

間違えた……。

そう気付いても時は遅く……

俺と由恵は人の波に流されて行く。

……マコ……美咲……さよなら

俺は心の中で一人に小さく手を振った。

「……もう……これじゃ、トモと美咲をくつっつける作戦が台なしだよー。」

由恵はそう言いながら、大きな水槽を泳ぐ鮫を眺めていた。

「俺と美咲をくつっける作戦じゃなくって、由恵ヒマクをくつっける作戦だろっ。」

俺も視線は鮫に釘付けになりながら、由恵に向かって返す。
由恵は小さくため息をつくと

「……もう、どうでもいいこと…

と、呟いた。

しかし、俺と美咲が迷子になる予定が… マコと美咲が迷子になってしまつとな

そんな事を考えながら、後方へと視線を移す。

そもそもマコ達が追い付いて来てもいい頃なのに…

すると、人込みに紛れてマコの姿を発見した！

……よし！改めて作戦開始！

……。

……。

何でマコと美咲はどうしても紛れて手を繋いでいるの？

しかも二人ではにかみ合つて

どうからどう見てもラブライブカルプルにしか見えませんけど……

■

俺の視線に気付いたマコは、俺の姿を見つけるなりこっちにやってきた。

ふうん

せつかく手を繋いでたのに、わざわざ手を離してからじつに来る
んだ…。

俺はひたすらマコを睨み付ける。

「何だよ？」

マコが俺の視線に、不思議そうに顔をしかめて聞いてくる。

「：別に！」

俺は、わざとらじくマコを無視して一人で水中トンネルへと足を進めた。

第4話

「トモウー」

由恵が俺の後ろを追い掛けて来る。

……。

「……何で由恵が追い掛けで来る訳? 由恵はちやんとマコの隣をキープしておこへよ。」

「……だつて……一人共樂しそうに話してゐるのに邪魔なんて出来ないよ。」

由恵は俺の言葉にそつ答えると、少し俯いてシュンとしていた。

…… もつひー。

俺はそんな由恵の手を引いて水中トンネルの真ん中まで歩きだした。

「ほひー! 上見じいりん。 タコだぜー! ～タコー。」

俺の言葉に由恵は視線を上へと移す。

「……うわあー凄いータコが泳いでるよー美味しそうだね?」

由恵はやつ言ひついで、楽しそうな笑顔で俺を見た。

「踊り食ーーいいねー超皿そーー」

俺もそつ言つて由恵を見る

…だつて、あの吸盤とか…

超皿そーー

俺は由恵と二人で口を開けながらタコを眺めていた。

バシツ!

…痛い…

「水族館に来てよだれ垂らしてゐ奴初めて見たよ…」

俺は叩かれた後頭部を抑えながらマコを睨む。

「…アハハ！本当に由だれ出てるよー。」

美咲が続けてそう言つと、俺の口元にハンカチを当てた。

…そのハンカチが凄くいい匂いで…

…萌え…

「トモ！カニー！カニー！」

すかさず由恵が叫び出す。

俺は由恵の指差す方へと視線を移す。

本当だ！カニーがいる！

「「超~~巨乳~~かわいー。」

由恵と声が揃つてしまつ。

「…アハハっ！」

後ろからマコと美咲が、腹を抱えて笑つていたがそんなの構つもんか！

俺はカニが食いたい！

唯一、この気持ちを解ってくれる由恵へと視線を移す。

由恵は大きな口を開けながら、じーっと水槽を眺めていた。

……。

……萎え……

* * * * *

「「カーペットとタコのマリネ！」」

またも由恵と口を揃えて答えてしまつ……

俺達は昼飯を食いに来ていた。

メニューを見ていて止まるのは……やつぱつタコとカニ。

…だって…超食いたかったんだよ。

「マ」「と美咲はクスクス笑いながらメニューを見てくる。

…やつぱりの一人、お似合いだよな…

残念だけど由恵の入る隙間はなさそうだ。

「…何だよ…気持ち悪いな…」

マ」「の言葉に、マ」「を見つめてこた自分に気付く。

俺は隣に立たせられたと身を寄せせて、小声で

「マ」「と美咲ついで進んでるの…」

と聞いてみた…。

「トモー」

慌てて口を出して来たのは

…由恵…

…聞こえてたのかよ…

思わず、美咲に視線を移す。

美咲はクスクス笑いながら

「私は、トモと由恵の方が気になるけど？」

と、返してきた。

その言葉に慌てたのは

…由恵…

「美咲！私はトモとはそんな関係じゃないよー大体トモなんて『アリカシ』ないし大嫌い！」

そう言つて俺を睨み付けやがった…。

マコと美咲は大きな声で笑いだす…。

…ちくしょう…

美咲の様子を見てれば、マコと美咲はまだ何もない事はわかる…。

むしろ、怪しいのは由恵だら…

あんなに慌てて、何かあつたつて言つてるようなもんじやないか。

…キスだつてしてないのに

たかだかノリで三日付き合つただけだろ？

…しかも大嫌いって…

俺は無言で由恵を睨み付けてから、手元の水を一気に飲み干した。

第5話

あれから俺達は買い物をしたり、海を見に行つたりと遊びまわり、
帰りの車に乗つた頃には夜になつていた。

…作戦？

そんなの随分前に諦めた！

だって何をしても上手くいかずに、マコと美咲は一人でいい感じだし…

何気に由恵と一緒にいるのも楽しかつたし…

ま、いつかーって感じで遊びまわつてた。

…それにしても…

「何でお前が助手席に座つてるの？」

俺は隣に座る由恵に小声で話しかけた。

「智博が寂しくないよう元気を使つたんだろー」

「後からマコが答える。

…聞こえてるのかよ…

「気なんて使つて貰わなくていいよー俺はマコが隣に居て欲しかったー！」

俺は後に座るマコにムキになつて答える。
隣から由恵が驚いた顔で俺を見つめていた。

「…智博…僕はそういう趣味はないぞ…。」

マコが小さく呟いた。

…変な言い方をしてしまつたようだ。

もちろん俺だつてそんな趣味はない。

だけど…

「…手くらいで握つて欲しかつた…」

俺はそつと呟いた。

もちろん冗談だ！

しかし、マコからの返事がない…

俺はルームミラーで後部座席を覗いてみた。

マ「な口を開けたまま固まっていた…。

…「冗談の通じない男だ…

…？

…あれ？

車がゆっくりと止まりだした。

アクセルを踏んでも進まない…

俺は慌てて車を路肩に寄せた。

同時に、車は完全に止まってしまった…。

…マジかよ…

皆もそれに驚いている。

マ「な一日外に出てから、運転席のドアを開けると鍵を回してHン

ジンをかける。

しかし、一回エンジンはかかるとも、直ぐに止まってしまう…

「…智博…一つ質問してもいいか?」

マコがそう呟いたので、俺はマコへと目を向ける。

マコは俺の顔を見てから口を開いた。

「…ガソリン入ったか?」

…。

俺は口を開けたままマコを見つめる。

…ガソリン入れるの忘れてた…

「信じらんねえ! ガス欠で車止める奴が本当にいるなんて!」

…マコの言葉に向も返事を返せない…

…俺だって、ガス欠で車を止める奴が居るなんて、初めて知ったよ。

「…しようがない…ガソリン買いに行くか…その前に車を移動するから智博押して…」

マコが大きなため息をついてそう言った。

俺は車から降りると、後に回って深呼吸した。

…ふんっ！

力いっぱい車を押す！

…だが、びくともしない…

「…何やってんの？」

突然掛けられた声に顔をあげると…

…マコが「王立ちで睨んでいた…

「…まだ押しても意味ないだろ？僕が合図してから押してくれよ…」

…なるほど…

「私も手伝つよー。」

美咲がそう言いながら俺の隣にやつてきた。
反対隣には由恵が来た。

……女の子に挟まれる俺……

超いいつー！

……しかし……

「三人も居たらスピード出過ぎちゃうよ。一人は車を降りてくれる
だけでいいからねー。」

……と叫びだした……

……俺のハーレムを邪魔するなよー！

そしてマコは運転席のドアを開けると、ハザードをたいてハンドル
を持ったまま車を押し始める。

ゆっくりと動か出す車……。

「智博ー押してー！」

「マコの言葉に俺も力いっぱい車を押す。

車は浚に動き出す。

……さつきまでびくともしなかったのに

そのままゆっくりとマコハンバーの駐車場へと車を入れる。

「よし！ オッケー！ あとほガソリンだ！」

マコが車の鍵をかけながらそうついつて一カツと笑いかけた

……ちくしょり……マコがかっこよく見えるじゃないか……

……まじ見ゆよ！ 由恵も美咲もマコをいつもと見つめて語るし！

……しかし……

俺にはまだ作戦がある！

わざと車を押しながら考えた作戦だ！

……「」の作戦が成功すれば……

かなりの美味しいオマケがつくかも…。

「智博！ガソリン買いに行くぞー！」

マコがそう言って道路へと足を向ける。

「マコーー待つてーー今の時間じゃガソスタやつてないよーー」

俺の言葉に時計を覗いたマコ。

「時間は9時を少し過ぎたところだった。

「24時間やつてるガソスタなんていぐりでも……」

マコはそのまま言つて、思い出したように言葉を止めた。

そしてがっくりと肩を落として口を開いた。

「……駄目だ。セルフじゃ、ガソリンを売つてくれないんだった。」

「…もうなのですー！」

セルフではガソリンを容器で売る事はできません！

…つまり…

今の時間もやつているセルフ以外のガソスタを探さなければいけな

いのです！

：面倒臭いでしょ？

ところ訳で、ここで作戦を実行！

「…もう今日はさ、どつかに泊まっちゃわない？」

俺はそつとから皆の顔を見た。

第6話

「…何でこうなるんだよ

俺はベットに座り楽しそうに携帯をいじっている由恵に視線を移す。

：事の始まりは一時間前：

俺の提案に惑いながらも賛成した三人。

俺は強行突破でタクシーを止め、近くのラブホテルまで向かって貰つた。

ラブホテルと聞いて固まってしまった美咲とマコ。

俺はそんなお構いなしで、隣に座る由恵に小さな声で囁いた。

「…由恵、いいか？覚悟を決めるんだ！」

俺の言葉に、由恵は力強く頷いた。

「…ブホッ！…ゴホゴホッ！」

助手席でマコが変な咳をし始める。

… 風邪でも引いたのか？

まあ、マコが風邪をひこうが関係ない！

俺はこれから起るであろう出来事に胸を高鳴らせた。

これから向かうのはラブホテル…

まさか、男同士で部屋を借りるわけには行かない。

つまり必然的に男女ペアになる訳だ！

勿論俺の頭の中では、俺と美咲、マコと由恵のペアを組む予定だ。

…後は由恵のおこづけ作戦でマコを落とす！

さすがのマコも、ラブホのおこづけ作戦では落ちては決まってる…

俺と美咲は…

チャンスがあれば嬉しい方向へ…

俺は一人でニヤニヤしながら、見え始めたラブホテルを見つめていた。

…なのに…

ラブホに着くなり、一人で部屋を選び始めるマコと美咲…

何故？

いつものマコなら動搖するハズだろ？

いつもの美咲なら警戒するハズだろ？

…もしかして…！

「マコ…」

俺はマコの腕を掴み、壁側まで引っ張る。

「マコと美咲ってもうけっせだったの…？」

…バシッ！

俺が話し終わらないうちにマコに頭を叩かれる。

「そんな訳ないだろ？ 部屋を借りるのは男女ペアでも、後から入り入り入れ代わればいいだろ？」

マコはそう言つて顔をしかめると、今度は由恵を見ながら小さな声

で

「……智博じゆく……由恵に覚悟を決めりつべしつづ関係なんだよね
前達？」

……と聞いてきた。

……さつきの会話、聞こえたのか？

それにしても、いじり入れ代わるつて……結局マコヒ恋のむか

じょりがない。由恵の代わりに、俺がおころけ作戦実行するか…

俺はマコの質問に答えるのを許されたまま、部屋を選んでくる由恵の元へと足を向けた。

……ハズなのに

何故か部屋にいるのは由恵

「…マコと部屋を交換しに行けよ…」

俺は由恵を睨みながら囁く。

由恵はそんな俺を気にも留めない様子で

「嫌だよ。」の部屋に入ってるんだよ。」

と続けた。

…もういい…

「わかった。俺が美咲と交換しに行く！」

俺はそう言って荷物を手にする。

…しかし、由恵に掴まれた腕がそれを邪魔した。

「…何で？私と一緒にマコの方がいいの？」

由恵は下から俺を見つめながら囁いた。

…そんなの…

「当たり前じゃないか！マコと美咲が一人で泊まるなんて考えただけでも羨ましい！」

俺がそう言うと、由恵は少し怒った様子で

「もういい！私お風呂に入るから勝手にしたらー？」

と言って、風呂場へと足を向けた。

：何怒つてんだよ？

俺は由恵が怒った理由がわからないままベットへと腰を降ろす。

： 美咲と部屋を交換しに行くか

…でも…

魔術の體験をするジヤーの著

俺の足は自然と風呂場へ向かってしまう。

曇りガラスにつつすらと映る由恵の姿

：これはヤバイ：

俺は黙つて曇りガラスを見続ける。

「…トモ?何してるので?」

曇りガラスの向こうから由恵の声が聞こえてきた。

俺は正直に

「覗き。」

と答えてみる。

すると聞こえてきた由恵の

「…最低。」

の声。

……?

あれ?でも、怒ってはいない…よな?

「…トモ、私出たいから退けて?」

由恵の声に、俺は部屋へと足を向け…

…る訳がない!

「わかった」

と返事だけして、壁に隠れる俺。
勿論、顔だけそーっと向ける。

曇りガラスがキーッと開く。

由恵の手が伸びてきてバスタオルを掴む。

…そして…

バスタオルで身体を隠しただけの由恵が姿を現した！

…萌え…

そのまま下着を付けて行く由恵。

…そして…

「キヤーーー！モ向してんの！？最低！」

…と響いた由恵の声…

俺は慌てて部屋に戻るとそのままベッドに潜り込んだ。

第7話

「トモー何隠れてんのー!?

由恵がそう言つて俺が被つていた布団をめくつ上げる。

……!

俺は由恵の格好に釘付けになる。

男物のTシャツにトランクス…

何とも萌えじやないか…

……しかし…

「そのTシャツとパンツどうしたの?..」

俺の質問に、由恵は一コラと笑つと

「それも『パンツ』で置つてきたんだよ。」

と答えた。

なるほど。せひや、俺が泊まひとつ置いてから由恵と美咲は「ンハビ
二へと買い物をしに行つたな。

…て事は…

「美咲も同じ格好してるのか？」

俺の言葉に由恵は少し考えた様子で

「多分、美咲も買つてたからそりそりじゃないかな？」

と答えた。

…美咲もそんな格好を…

…萌え…

… という事は？今頃マコは美咲のそんな姿を見ているのか？

… あぬじーすゐこずゐこー

俺は慌てて部屋の出口へと足を向ける。

しかし、直ぐさま由恵に腕を掴まれた。

「どう行への？今更マコの所に行つたって邪魔になるだけだよ？」

由恵は俺を睨みながらさう言った。

……確かに……今マコの部屋に行って、一人がお取り込み中だつたりしたら……

……俺、立ち直れないや……

俺は、このやり切れない思いを由恵を睨み付ける事で解消しながら風呂場へと足を向けた。

と由恵に釘をさして洋服を脱ぎ始めた。

そして

「覗くなよ！」

……それでも……問題はマコだ……

何でこんな事になってしまったんだろう。

上手く行けば今頃、俺と美咲のアバンチュールが待つてたのかもしないのに。

このラブホテルがマコと美咲の記念すべき場所になるのかもしれない。

それは嫌すぎるー。

俺なんて一年も彼女が居なくて、寂しい毎日を送ってるのに。

…ああ、三日だけの彼女なら話たかな？

「…ふう…」

俺はバスタオルを腰に巻き、風呂の外へと出てきた。

…

…！

「ギャーーっーー？」

俺は鏡に写る背後の首に腰を抜かした。

「…由恵…！？何覗いてんだよー？お前は痴女か？」

俺は振り返り、後ろで笑い転げている由恵を睨み付けた。

「アハハ！びっくりするでしょう。わたくしのお返し！」

由恵は楽しそうに笑いつつ、笑いながら部屋へと戻つて行つた。

…むかつく…

俺は冷蔵庫から缶ビールを取り出すと、蓋を開けながらベットへと腰を降ろした。

由恵はベットの上で正座して俺を眺めていたが、俺はそんな由恵を無視したままビールで喉を潤した。

「ねえ、何怒つてんの？」

後から聞こえる由恵の言葉。
しかし俺は何も答えない。

「美咲の事気になるの？」

その質問にも答えない。

「美咲の事好きなの？」

…しつこい…。

俺は振り向き由恵を睨む。

「…三田だけの彼女よりも美咲が好き？」

由恵はそう言つと、少し不安げな表情をして見せた。

「…三田だけの彼女って言つても、何もしてないだろ？」

俺はそんな由恵を一瞥してから口を開いた。

由恵はその言葉に俺を睨みながら

「何もしなきゃ彼女じゃない訳？好きな気持ちも沸かないの？」

と言い返す。

…由恵…

…そんな事は…

「当たり前じゃないか！心も身体も相手を求めて、初めて恋しくなる…」

俺は言い切った。

はつきり言つ！

俺は可愛い女の子が大好きだ！

だから特別可愛い美咲はもっと大好きだ！

勿論、由恵も可愛いからそれなりに好きだけど……

何にもしてない内から特別なんて

有り得ないだろ?

だから俺はマコが不思議でしうがない。
何でここまで美咲を想えるのか。

俺は押し黙った由恵をちらりと見てから、空になつた缶ビールをテーブルの上へ置いた。

「…ようか?」

不意に由恵が何かを言つたので、俺は由恵へと視線を移す。
由恵は少し俯いていた視線を俺へと向けると、力強く口を開いた。

「…試してみようか?トモが私を好きになるのか。」

第8話（前書き）

試す？何を？…もちろん大人の関係です。

「……試してみるっつもが私を好きになるか。」

……昨日の由恵の言葉が頭に残る。

俺は隣を歩くマコへと視線を移した。

「マコ？ 昨日、美咲と何かあった？」

俺の言葉に、マコは俺を睨み付ける

「ある訳ないだろ！？ 大体、何で部屋交換に来なかつたんだよ？ お前等の方が怪しいだろ？ …おかげで僕は寝不足だし。」

と返してきた。

マコの話によれば、美咲も由恵に部屋を交換の話はしたらしき。しかし、由恵からの返事は

「……気が向いたら行く

だったらしく、マコと美咲は由恵が来るのを待つてたらしい。

しかし由恵はいつまで経っても来なかつた。

ので、美咲はベットにて

マコはソファーで眠りについたらしく。

俺はそんなマコの話を聞きながら、見え始めたコンビニをぱーっと眺めていた。

「ただいま！」

マコが由恵と美咲に声をかける。

二人は止まってしまった俺の車の前で楽しそうに話しか込んでいた。

しかし、俺達の姿を見付けるなり笑顔で

「おかえり」「
と声を揃えた。

俺は一瞬由恵と田代が合つたが、慌てて視線を他へと逸らす。

マコはガソリンタンクにガソリンを入れていた。

俺はそれを手伝う振りをして、由恵からの視線に逃げていた。

…俺の中に広がる罪悪感…

誰に対して？

そんなの由恵に決まってる。

…正直に言おう…

…俺は試した。…昨日の夜。

試した…と言つたのも…

…我慢できなかつた。

当たり前だろ！あんな密室で！あんな挑発されて！

…据え膳喰らひつは男の恥！

あれで我慢出来る男が居るなら会つてみたいもんだ！

俺は、はりひつと視線をマコへと移す。

…多分、マコ位だひつな。
密室で手を出さない男なんて…。

…はあ…

何だか今日のマコが格好よく見える。

凄いよ…。美咲と何もなかつたなんて。

…俺はますます罪悪感に駆られ始めた。

「アモー全部マコに任せつけじやんー」

由恵が悪戯気に俺を覗き込むとわざと笑つて見せた。

…何でこいつはこんなに普通で居られるんだよ…

俺はそんな由恵を無視すると、運転席へと乗り込んだ。

…しかし…

「…だから何でお前が隣に乗るんだよ…」

俺の言葉に、助手席に座った由恵は俺を覗き込むと

「トモが私を無視するからだよ?」

と言つて笑つて見せた。

マコと美咲は片付けを済ませてから、車に乗り込むと一人で楽しそうに話をしていた。

…帰りの車内…

…何なんだこの温度差は…

後では楽しそうなマコと美咲。

時折マコが眠たそうに欠伸をすると、美咲はマコをとてお嬢おじやうに見て、微笑んでいた。

それに比べて俺と由恵は…

ずっと無言のまま…。

時折由恵は俺へと話し掛けてくるが、俺は軽く返事をするとまた黙つて運転を始める。

…何でかわからないが胸のモヤモヤが取れなかつた。
由恵に対する罪悪感なのか

マコに対する劣等感なのか

…何で我慢出来なかつたんだよ…

…何で我慢出来なかつたんだよ…

今まで、こんな気持ちに襲われた事なんかなかった。

今までの彼女とやういう関係になつた時は、やつと出来たと達成感に包まれていたし、

一夜限りでそういう関係になつた時は、ラッキーだとしか思つていなかつた。

なので……今は広がるこの胸のモヤモヤ。

「……まあ……」

俺は大きくため息をつくと、ちらりと由恵へと視線を移す。由恵はぼんやりと外を眺めたまま、俺の視線なんかには気付かない様子だつた。

「じゃあ氣をつけて帰れよー。」

車を駅前へと停車をすると、マイヒと美咲はやう言つて降りて行つた。

……といづか……

「……お前も降りよう。」

俺の声に、助手席に座る由恵はじつと俺を見つめた。

「嫌ー私トモんち行くんだもんー！」

由恵の一言に俺は開いた口が塞がらなくなる。

「…何しに来るんだよ…」

俺の言葉に由恵は俺を見つめたまま

「トモの気持ちを確かめにー！」

俺は小さくため息をついてから
と言った。

「…姉ちやんに余計な事言つなよ…」

と言つて車を走らせた。

第9話（前書き）

トモフランの皆様…トモを嫌いにならないで下せ…（汗

第9話

「……で？俺に何の用だよ？」

俺はベットに転がり楽しそうに雑誌を広げる由恵を見ながらさつと書いた。

「…たでしょ？」モの気持ちを確かめに来たの…」

由恵は雑誌を読む手を止めずにさつ答える。

…確かめるつて何をだよ…

俺は何も答えないままベットに腰を降ろす。

「私はトモの特別になれた？」

由恵は俺の顔を下から覗き込むとさつ聞こてきた…。

…俺は何も答えられない。

…由恵の質問は、俺の中の罪悪感を更に引き立たせた。

…由恵をじつ思つてこるのか正直わからなかつた。

…だけれども。

俺の視線は、ついつい由恵の腕に行ってしまう。

由恵のキャミソールから伸びている由恵の腕が、昨日の夜の出来事を思い出させる。

…駄目だ！我慢しちゃ俺！

頭に鳴り響く警告音。

しかし…

俺は由恵の腕を掴むと、グイッと引き寄せせる。

途端に由恵の身体は俺の腕の中に収まつた。

…駄目だ…駄目だ駄目だ！

頭の中とは裏腹に、俺は由恵に深いキスをしてしまう。

…そしてそのまま性欲に身を任せた俺…。

…最低だ…

あんなに後悔していたのに

結局、我慢出来ないんじゃないか…。

俺は隣で眠る由恵へと視線を移す。

「…由恵。そろそろ起きろー。」

もう外は薄暗くなっていた

由恵は眠たそうに顔を擦ると、毛布で身体を隠して起き上がった。

…本当だつたらこれも萌えポイントなんだナゾ…

何故か、今の俺には萌えなかつた。

…男つて薄情だよな…

また酷い罪悪感に駆られる

「…やるやう送るよ。」

俺は由恵の頭をポンと叩いてやついた。

…ボスンっ！

ベットに倒れ込む俺。

布団には由恵の甘い香水の香りが僅かに残っていた。それが俺の胸をめひゅへひゅて締め上げた。

…何でもひっかけつただよ。

俺はベットに置かれていた雑誌に視線を移す。

手を伸ばし雑誌を取るとペリペリと巡してみる。

由恵の好きなふわふわの格好をした女の子達。

丁寧に巻かれた髪が由恵を思い出させた。

…俺は由恵が嫌いな訳じゃない。

むしろ好きな方だ。

由恵と居るのは楽しいし。

…でも、そんな大事な友達を汚してしまった。

…ただの性欲で。

…その気持ちの方が強かった。

由恵を送りに行つた時
俺は由恵に
「付き合おうか」
と言つた。

そつ言つ事で自分の中の罪悪感を取り払いたかったのだ。

しかし、由恵からの返事は
「ヤダ！」
の一言だった。

…正直、俺はホッとしていた。

由恵も俺に恋をしている訳じゃない。

それが、由恵も同じ過ちを犯した仲間のよう勝手に思っていたんだ…。

俺は携帯を取り出すとメール作成の画面を開く。

送信者の所に由恵のアドレスを打ち込む。

「今日は本当にめさん

そう入れてから、消去する

…『めんせマズイよな…

「昨日は楽しかった

そしてまた消去。

…俺の脳裏に浮かぶ昨日の出来事は…ベットの上の出来事しか思い浮かばなくなっていた。

「また連絡する」それだけ打ち込むと送信した。

結局、何で送ればいいのかわからずこ

第10話

「…信じられない！」

私はそつと、手にしていた携帯電話を放り投げた。

「また連絡する」

それがトモから送られてきたメールだった。

絵文字も入ってないし、短いし！

それに『また』っていう？

私はそれまでトモからの連絡を待たないといけないの！？

イライラする。

何がって…トモの態度が！

急に冷たくなるなんて！

そんな解りやすい態度取らないでよー！

…ボスンッ！

私はベットに倒れ込むと、枕に顔を埋めて溢れ出した涙を堪えようとしていた。

…トモの田井私はじつ映つてゐただひつ。

好きでもない男と簡単に寝ちゃひつ軽い女?つ

…好きでもない男と簡単に寝れる訳ないじやん

…アモだからなの

あの男はそれに気付いてない…。

…悔しい!

私にとって、トモはこんなに特別なの!ー

なにこ…私とマコをくつつかむとか…自分と美咲がくつつかむとか…
訳分からぬい作戦ばっかり!

ガス欠で車を止める…

泊まりうーなんて!!H!!Hの作戦立てるしー

しかも、一緒に寝るのが私よりもマコがこいつで…

馬鹿にしそぎ！

…本当に何であんな最低男を好きになんかなつちやつたんだろ？…

トモなんてマコみたいに優しくないしー

マ「あたしに気を使わなさい！」

マコみたいに！

•

頭に浮かぶトモの言葉。

：私の胸がチクリと痛む

自分でも気付かなかつたよ。

こんなに頭の中がトモだらけになつてたなんて……

私はグルンと寝返りをうつ。

その拍子に、私の身体からトモのつけてたブルガリの香水の残り香がした。

それが私の胸を締め上げる

…お風呂に入るのが勿体ない。

もう少しトモの香りに包まれていたかった。

帰りの車内。

トモは私に

「付き合おう」

つて言つてくれた。

…トモからの二度目の告白

付き合える訳ない

こんなに好きなのは私だけだって解り切つてる。

それに、身体を重ねた今

また

「ノリ」だなんて言われたら、もう立ち直れる自信ないよ。

私は放り投げた携帯電話に手を伸ばす。

「また連絡する」

トモからのメールを見つめた。

第11話

あれから俺は由恵に連絡する事が出来ないまま、一ヶ月たつていた。
…。

なんて言って電話をかけねばいいのか…

どんな顔して会えればいいのか…

そんな事ばかりが頭を巡り、結局何も出来なかつた。

…それに、会つたらまた由恵を抱いてしまうかも知れない…

それが、俺の考え全てをストップさせていた。

しかし、今日は何が何でも由恵に会わなくてはならない…

俺は目の前の鏡に写る自分の髪をワックスで整えていく。

「よしー完璧カッコイイ」

いつも以上に満足のいく仕上がりに思わず顔がにやけた。
そのままネクタイも直す。

「随分気合い入ってるねー！」

…！

突然後から掛けられた声に驚き振り向く。

「…姉ちゃん…勝手に除くなよ…」

俺の言葉に、姉ちゃんは俺を睨み付けると

「…勝手について…」これは家族で使う洗面台でしょ？何であんたの許可が必要な訳！？」

と、怒鳴り付けた。

…もつ…朝から煩いよ…

俺は姉ちゃんを無視して身嗜みを整える。

「大体さ、タツも結婚披露パーティーなら私も呼べばいいのに…！」

姉ちゃんは俺をちらりと見てからブツブツと呟き始めた。

… 何で姉ちゃんを呼ばなきゃなんないんだよ…

俺は鏡越しに、ブツブツ言いながら戻つていく姉ちゃんを見送り、また鏡の自分と向き合つた。

そう。今田はタツヒ元子の結婚披露パーティーがあるので。

出来ちゃった婚で、ちゃんとした式は挙げられなかつたけど、代わりに小さなお店を貸し切つて友達だけでパーティーをするのだ。

なので、学生時代の友達にも久々に会えるし、楽しみなイベントではあるのだが…

「… はあ…」

俺は、一週間程前にかかつて来たタツからの電話を思い出し、ため息をついた。

… 俺の頭を悩ませる事…

もちろん、由恵の事は今の俺には最大限の悩みなのだが…

それ以外にも増えていきそうな厄介事を想像する…

マコに何で言ひ出さうか…

俺はもう一度ため息をつくり、玄関へと足を進めた。

* * * * *

「おはよう」

マコがやつれて助手席へと乗り込んできた。

スーツ姿のマコは、何だかいつもよりも好青年な感じで、俺はルーム://リーで自分の顔をのぞき見てしまった。

いつもよりキマッていると思っていた髪型は、何だか安っぽいホストを連想させて少し悔しくなった。

俺はそんなマコをひびひとつ見てから、マコの家から車を走り出る。

……さて、何で話を切り出さつか……

出来るだけ遠回しに……

マコが帰ってしまわない様に……

信号が赤になり、俺はブレーキを踏む。

そして、大きく深呼吸するとひびひとつマコを見て口を開いた。

「……マコ。今日純子も来るの知ってる?」

俺の言葉にマコは口を大きく開けて俺を見詰めた。

……しまつた

あまりにも大事な部分から話始めてしまったかな

まあいいや

俺は、マコをちらりと見てから信号が青になると同時に車を走らせた。

マコはまだ、口を開けたまま俺を見つめていた。

純子ってのは、実はマコの元カノ。すげえワガママで、マコは散々振り回されてた。

マコにとつては会いたくない相手だらう。

まあ、俺にとつても会いたくない相手でもあるんだけど。

「…なんかさ、元子つて昌栄中学だつたらしいんだよね。…ほら、純子も昌栄だつたじやん？」

俺は真っ直ぐ前を見たまま言葉を続けた。

「あんまり仲良い訳じゃないみたいだけど、一応同じグループだつたらしくてさ…タツも純子が来るとは思つてなかつたらしいんだけど…名簿を見たら名前があつたらしくて…。」

俺はそう言いながら慌てて電話をよこしたタツを思い浮かべた。

（…頼むよーマコに上手く言つておいてよ！俺もそんな事考えもしなかつたから、ちゃんと名簿見てなかつたんだよ！）

…自分で言えぱいいのに。

まあ、俺もマコに欠席されるのが怖くて今日まで言えなかつたんだけど。

マコは俺に向いてた視線を、前へと移すと小さくため息をついてから

「…しようがないか。竜揮と元子の披露パーティーを欠席する訳にもいかないもんな。…大体、今更顔を合わせたからって何かが起き

る駅でもないし。」

と、力無く笑つて見せた。

…俺は何かが起きそうな予感が凄いするんだけど…

だつて、あの純子だぜ？

絶対、俺やマコに絡んで来るに決まってる。

俺はそんな事を考えながら、見えて来た駐車場に車を止めた。
そのまま車を降り、店へと足を進める。

「マコちゃん…」

マコと店へ入る所とした時、後ろから呼び止められた。

…マコと一緒に振つ向くと

…可愛い…

俺はおもわず一ヤけてしまった。

そこには、セクシーな赤いドレスの美咲と、淡いピンクのふわふわ
ドレスを着た由恵が居たのだ。

…ちなみに俺が見とれたのは…

もちろん美咲！

ドレスから見える長い手足も、ふわふわのアップにした髪の毛も、まるでハリウッド女優みたいじゃないか！

本当にいつまでも見ていたい…

…痛いっ…！

俺は痛み出した右手を見てみる。

そこには頬を膨らませて俺の腕を抓る由恵がいた…

「…私も居るんですけど…」

由恵は小さくそう言つと、大きな瞳で俺を睨み付けていた。

ピンクのふわふわのドレスに、綺麗に巻いた髪の毛。

確かに可愛いんだけど…

「…なんか綿あめ食いたくなつた…」

俺はぽつりと呟いた。

その一言に、由恵はますます頬を膨らませ

「トモなんて、売れないホストみたい！」

と残して店へと入って行った

… 売れないホストって…

俺は店の窓ガラスに移る自分の姿をぽつんと見つめた。

「美咲！なんか飲む？」

マコが美咲にそう聞きながら、飲み物を持って歩いている店員さんを呼び止めた。

美咲はその中からオレンジ色のカクテルを手に取りマコに笑いかけている。

俺も手元の白ワインをグイッと飲み干すと、店員さんのトレーの上から新しいグラスを手に取った。

…つまらない…

…つまらない…つまらない…つまらない！

…立食スタイルのパーティー会場で、俺は一人ぼつんとしていた。

タツは元子の手を取って、皆に挨拶に回り回るし。

由恵はあれから機嫌が悪く、俺に話し掛ける事なく別の友達の所に行っている。

高校時代の友達の所には…純子が居るから行きたくないし。

…マコはせたうと美咲こみまつかり話しあげるし…

「…そんなに純子が気になるの?..」

俺は、美咲がトイレで行った隙にマコに聞いてみる。

マコは驚いて俺を見てから、言いよつと葉を探しているが…
俺はそれを遮るよつて口を開いた。

「…何かにつけて美咲美咲つて…まあで、今は美咲が困つて純子
に見せ付けたいみたいだよ…」

その言葉にマコは真つ赤な顔をして

「…そんなんじゃなーいよ

と、ワインを飲み干した。

…わかりやすい奴…

俺も小さくため息をつてからワインを飲み干す。

それを見てマコが店員さんを呼び止める。

「マコー・モー。」

突然後ろから誰かに呼ばれ、俺は声の方へと振り向いた。

…げつ…！

俺は慌ててマコへと視線を移す。

マコは大きな口を開けたまま固まっていた。

「…久しづりじやん」

俺は、視線を黒のドレスに身を包んだ純子へと移し、慌てて声を掛ける。

純子はその言葉にニコニと笑うと

「元子の旦那がタツだったなんて超びっくりだよ！」

と言つてマコへと視線を移した。

純子は大きく胸の開いた黒いドレスに、長かつた栗色の髪を頸のラインで切り揃え、まるでキヤバ嬢の様に髪を盛つていた…

俺はそんな純子を見て、昔母ちゃんに読んで貰つた白鳥の湖に出できた意地悪なお姫様を思い出した。

しかし、栗色のボブというヘアースタイルがなんとなく美咲に似ているが、人によってこれほどまでに印象が変わるのでから不思議なもんだ…。

確か白鳥の湖も一人のお姫様が出てきてたっけ。

そんな事を考へていると

「…智博！俺もトイイレー！」

…マコが早足で逃げて行った…

純子は慌ててマコを止めようとしたが、あまりの早さで立ち去ったマコを止める事が出来なかつたよ！だ。

そんな一人をよそに、俺も純子に気付かれない様にそーっとその場のから立ち去るよ！とした。

…が…

「…トイ…」

純子が俺の腕を掴む…。

そしてそのまま自分の腕を絡ませてきた。

「…マコ、久々に会つたのに冷たいよ…トイサは優しくしてくれるよね？」

そつと上目使いで俺を覗き込む純子。

俺の視線は大きく開いた純子の胸元に釘付けになつた。

「…ねえ、トモ～さつきマコと一緒に居たのって藤井美咲でしょ?
マコと付き合つてゐるの?」

純子は尚も上目使いで聞いてくる。

俺はその質問に何も答えずに、俺の腕に絡み付いた純子の腕を振りほどく。

しかし純子はそんなお構いなしに、またも俺の腕に自分の腕を絡み付かせる。

そして

「藤井美咲つて男遊び激しいらしきじゃん! マコ大丈夫なの? 遊ばれてるんじゃないのかな?」

と言つてきやがつた!

俺はその言葉に、さつきよりも強く純子の腕を振りほどくと純子を睨み付けた。

「美咲はそんな奴じゃないから大丈夫だよ! 大体、元子の友達なのによくそんな事が言えるな!」

俺はかなり苛々しながら純子に言葉をぶつける。

純子は分かりやすい程に頬を膨らませると

「…だってマコ、そういう人に引っ掛かりそだだから心配なんだも

ん…

と呟いた。

俺はそんな純子を無視して歩き始めた。

…なんだか純子の言葉が、純子がマコを弄んでいたと認めているような気がして余計に苛々させた。

しかし俺はすぐ止めた。

淡いピンクのドレス。

腰まで伸びたふわふわの髪の毛。整っている訳ではないが、何だか引き付けられる顔立ち。

俺は一瞬で、田の前に立つ彼女に見とれてしまった。

…めひやめひや好みだ…

「純子…」

彼女はやつて柔らかい笑顔で純子の元へと駆け寄った。

俺はつい、彼女の姿を田で追つてしまつ。

ピンクのドレスも、ふわふわの髪の毛も、柔らかい雰囲気もなんだか由恵に似ている。

多分、顔は由恵の方が可愛いのかも知れない。

でも俺は、彼女から目が離せない。そして、彼女を見付けたと同時に高鳴り始めた胸の鼓動…

…一目惚れだった。

第1-3話

僕は彼女に恋をした

そんな映画のよつたフレーズが俺の頭を過ぎた。

彼女は純子の元へと駆け寄ると楽しそうに何か話し掛けている。
俺は、彼女をただ見つめていた。

そんな様子に純子は気付いたようで

「トモ！」
と、俺を呼んだ。

… まづいな…

純子は変な勘だけは鋭いからな…

しかし、そんな想いとは裏腹に純子の方へ歩き出しつしまつ俺の足…

… なんでこんなに素直なんだよ俺は…

「紗英ー！トモだよ。元カレの友達なんだ。」

純子が、彼女に俺を紹介する。

紗英ちゃんって言うのか…

俺は出来る限りの笑顔で彼女に微笑む。

「よろしく。トモって呼んで。」

俺の言葉に、彼女は目を大きくして俺を見つめた。

…ヤバイ…

そんなに見つめられると心拍数が上がる…

「カツコイイね！凄いびっくりした！」

彼女は突然そう言つと、一コツと俺に笑いかけた。

…カツコイイ…

その言葉に俺の鼓動は更に早くなる。

もしかして、彼女も俺に一目惚れ！？

俺は思わずニヤけてしまいそうなのを必死で我慢する。笑うのならばカツコイイ笑顔で笑わなくちゃ！

俺は出来るだけクールに彼女に笑いかけると

「ありがとう」

とだけ言った。

彼女もつられて笑った顔がまた可愛いくて、俺の萌え萌え指数を上昇させた。

すると、不意に純子が険しい顔で俺の後ろを見つめている事に気付く。

紗英ちゃんも、目を大きく開いて俺の後ろを見つめていた。

俺もつられて振り返る。

…そこに立っていたのは美咲と由恵だった。

「トモ？ マコちゃんは？」

美咲は一コツと笑いながら俺に尋ねた。

俺がそれに答えようとすると…

「誠ならトイレに言つたよ。」

と、純子が割つて入つた。

…今まで純子がマコを誠と呼んでる所を見た事がないけど…
何故か純子は美咲に対抗心を丸だしにしていた。

俺は慌てて二人の間に入ろうと

「友達の純子だよ」

と、美咲と由恵に紹介した。

しかし、純子はその言葉に顔をしかめて

「友達じゃなくて誠の元カノでしょ？」

…と付け加えた。

その言葉に驚いた様子を見せたのは由恵。美咲はいつもと変わらない様子でニコッと笑つと

「そりなんだ？ 元子とは中学の友達？」

と返事を返した。

その様子に純子は、つまらなそうな表情を浮かべてから

「やうだよ。ってか、藤井美咲ちやんだよね？ 誠と付き合つてるの
？」

と、美咲に聞き返した。

…何なんだよこの空氣…

肝心のマコは居ないし…

俺は一人の間でオロオロしていた…。

美咲は、純子が美咲を知っていた事に少し驚いた様子だったが、直ぐにニッコリ笑うと

「せうだよ。」

と答えた。

.....。

.....。

ええつー? 一つの間にー?

俺と由恵はあまりに驚いた顔で美咲を見つめる。

……ちよ マコと美咲付き合ったの?

俺の許可も無しに?

ずるーーーずるーーーずるーー!

「…美咲つー!」

すると、突然マコが美咲の手を引っ張った。

美咲はそのままマコに手を引かれて行く。

俺と由恵も慌てて二人を追い掛ける。

ちやんヒマに話を聞かなければ!

しかし、美咲は俺達の姿をちらりと見ると足を止め

「…マコちゃんめんなね？嘘付いちやつた。」

と、舌を出して笑って見せた。

…嘘かよ…

俺と由恵はがっくりと肩を落とす。マコは一人、意味が分からずに

と美咲に聞き返した。

美咲は少し申し訳なれそうに俯くと、視線だけをマコに向けて

「…マコちゃんの元カノに…マコちゃんと付き合つてるのかつて聞かれ
て…つい…そだよつて言つちやつた」

と答えた。

…

…萌え…

ヤバイよ美咲！それは萌え指数がヤバイ高いよ！

美咲にそんな事言われたらマコは…

…ほら…真っ赤な顔して…

必死で照れを隠してるよ…

あーあ。羨ましい。

「…トモ？」

突然、由恵が小さな声で俺を呼んで、俺の手を引き出した。

何となく俺もそのまま着いていく。

「…邪魔になるから向こうに行こう?」

成る程。

俺もそれに頷いて、黙つて由恵の後ろを着いていく。

俺達は飲み物を手に取り、カウンターへとやつてきた。

でも、やつぱり由恵と二人は気まずいな…

そんな事を考えながらいると…

俺のポケットからメールの着信音が流れ出す。

差出人は…

…純子…

…俺はその名前を見て、アドレスを変えていなかつた自分に激しく後悔した。

そしてそのままメールを開く。

内容は…

「…」の後、マコと紗英と四人で抜け出そつよ。」

だつた

…「ひじみわ…

俺は、純子からのメールで激しく悩んでいた。
普通に考えて、純子と一緒に飲むのなんて嫌だ。
しかも、マコと純子をこうそりと会わしたくもない。

…でも…

俺の頭の中に浮かぶ紗英ちゃんの笑顔…

もう一度会いたい…

「トモ？ 何考えてるの？」

由恵が俺の顔を覗き込んで聞いてくる。

俺は何も答えないまま、手元の携帯をポケットにしまい込む。

由恵は少し怪訝な表情をしてから、カクテルを一口飲むと

「…あいつのマコの元カノ…トモにべつたりくつこてたね。」

と呟いてきた。

「あこつは男なら、誰にでもああだよ。」

俺は、自分の手元を見つめたまま軽く返事をする。
由恵は俺の言葉に、ちらりと俺を見てから

「…マコ可哀相…」

と呟いた。

…確かにマコは可哀相だ。

純子と付き合いつ前までは、そんな事など全然思わなかつた。むしろ、俺なんかはマコが羨ましいとすら思つていた。

だって、純子のボディタッチに、純子は俺が好きなんだと勘違いもしていたし…

だけども、マコと純子が付き合つてからは純子に振り回される
マコを可哀相だと思い始めた。

そして結局、元カレが忘れられないといつ理由でマコを振つた純子
…。

…本当最悪。

と思ひきや、今日の態度。

しかも、四人で抜け出さうだなんてよく言えたもんだ。

…でも…

あああ…会いたい…

紗英ちゃんに会いたいよ……

俺は頭を抱えながらテーブルに俯せになる。

隣で由恵が怪訝な表情をしている事に気付いて、慌てて笑顔を取り繕つたが、由恵はますます俺を見つめていた。

「……誰の事考えてたの？」

由恵は俺を見つめたまま聞いてきた。
俺はその視線がめちゃめちゃ痛くなつて、自分のグラスに視線を落としながら

「……マニア」

と答えた。

……嘘はついてない。

* * * * *

俺は一軒の居酒屋の前で立ち止まる。

……やばい緊張してきた……

少し深呼吸しなおす俺。

それにしても……結婚式の一次会で居酒屋をチョイスするとは……外観を見る限りじゃ、とてもこじんまりとした居酒屋のよつだ……。多分力クテルなんかは置いてないんだろうな……。

そんな居酒屋の前でスース姿で佇む俺。

俺はネクタイを取り、ボタンを二つ開けた。

……何が起きるが分からぬが……いざ出陣！

……ガラツ！

「こりつしゃい！」

お店の引き戸を開けると同時に、響き渡る元気な声。

多分、その声の主であろうタオルをかぶった、30代位の店主らしき人がカウンターに立つて焼鳥を焼いていた。

そしてその前にはカウンターに腰を降ろした純子と紗英の姿が……。二人はドレス姿のまま、焼鳥を頬張っていた。

お前ら、俺のスーツよりも浮いているぞ？

「あつー！トモ來た！すーちゃん、テーブルに移動するね？」

俺の姿を見つけるなり、純子はそう言つて自分の飲み物を持って、テーブル席へと移動を始めた。
紗英ちゃんもそれに続いて移動を始める。

…何だよ…その常連さんチックな会話は…

俺は、一応すーちゃんと呼ばれた店主らしき人に会釈をして、テーブル席へと足を進めた。

「ねえ、トモ…マコは？」

純子が椅子に腰掛けながら口を開く。

俺はその質問に、落ち着いて答える。

「彼女にバレると困るから、後から来るって。」

…来る途中に必死で考えた言い訳。
勿論、いくら待つてもマコは来ない。

「マニアには何も言つてないから

純子はその言葉に、少し眉を潜めて俺を見たが、信じた様子ですぐ
に笑顔を作る。

「紗英がね、ここでバイトしてるの。それで私もよく来るんだけど、
急にこここの焼鳥が食べたくなっちゃって。」

純子はそう言って目の前の焼鳥を一つ手に取る。

俺はその言葉に胸を撫で下ろしながら椅子へと腰掛ける。
そして冷静に考えた。

… 急に焼鳥が食べたくなったからって、ドレスで来た！？

どれだけ慌てん坊なんだよ…！？

俺は椅子の背もたれに寄り掛かりながら、店の中をぐるっと見回す。

そんなに広くない店内は、カウンター席とテーブル席が三つだけ。
客は俺達の他には、カウンターにおやじが一人、テーブル席におや
じが一人…

揃いも揃つて、カウンターの上部に置かれてあるテレビの野球中継
を眺めている。

テレビの脇には神棚らしきものもあり、ダルマや鏡餅の飾りものが
置いてある。

：見渡せば見渡すほど、女の子が一人、ドレス姿で来る場所ではない気がする…

「トモ！生来たよ。乾杯しよ！」

純子がそう言って、生ビールを手渡して来た。
紗英はそれを二コ二口で眺めてから

「乾杯！」

と嬉しそうにグラスを近付けてきた。

それがまた可愛くて…

俺は途端に笑顔が零れた。

狭い居酒屋だけど

ヌーツ姿だけど

カクテルないけど

おやじばっかりだけど…

来てよかつた

俺はそんな喜びを噛み締めながら、紗英に笑顔を向ける。

「乾杯！」

「凄い嫌な予感がする…」

隣でマコが呟いた。

「…どうする?」

反対隣で美咲が私の顔を覗き込む。

私は、視線を田の前の居酒屋へと向けたままキュッと唇を噛み締める。

…事の始まりは一時間前。

パーティー会場でトモと一人で飲んでいたけど…

トモはずっと落ち着かない様子だつた。

私が話し掛けても上の空。

原因なんて分かつてた

時々、私に気が付かれないように視線をマコの元カノへと向けていたから。

トモと彼女の関係なんて分からぬけど…

トモの腕に自分の腕を絡ませる彼女を思い出す…

途端に私の胸が苦しくなる

どんどん、トモが私を見てくれないのが分かつて…
私の気持ちばかりが溢れ出して…

限界だった。

私は必死に涙を堪えてトイレへと駆け出した。
身体なんて重ねても、心は重ならなかつた。
それを感じる度に自分に感じる嫌悪感。

汚い女

身体を差し出しても好きになつても貰えないなんて

可哀相な女

そんな自虐的なフレーズが頭の中に響き渡る。

溢れ出す涙。

上手に息も出来ない。

きっとトモは、こんな私の変化にも気付いてはいないだろう。
私がトモを想つて泣いてるなんて、考えもしないんだろうな…。

馬鹿な女

可哀相な女

汚い女

何度も頭に浮かぶ自虐的なフレーズは、私の身体に恐怖を植え付けて行く。

両手で自分の身体を包み込み、ゆっくりとしゃがみ込む。

可哀相な女

馬鹿な女

汚い…

「由恵…！」

突然、誰かに肩を掴まれ私は顔を上げる。

「…み…美咲い…」

美咲の顔を見た途端に、現実へと引き戻された安心感から涙が溢れ
た。

美咲の暖かい表情と、私の頭を撫でてくれる暖かい手。

それが、私の心を落ち着かせた。

美咲は何も聞かないまま、私の頭を撫でてくれた。

「由恵は泣いても可愛いね。」

美咲が冗談まじりに言つた、その言葉が「泣いてもいいよ」とて言ってくれた気がして

さつきまでの自虐的な気持ちを溶かしてくれた。

あんなに最悪な気分だったのに、凄く心が暖かくなつた。

そして、美咲の胸の中で氣付いてしまつた気持ち。

トモと身体を重ねた事が、こんなにも私を傷付けていた

トイレから出ると、マコが私達を待つてくれていた。

そして、マコの言葉が私を尚更震えさせた。

「…智博、多分どこかに行きそうだけど…僕たちはどうする？飲み

直す？」

その言葉に私は慌ててトモの姿を探す。

…トモはキョロキョロと周りを見ながら、出口へと足を向けていた。

端から見ると凄く笑える姿だったのだけれど…

私はそんなトモの姿に、また息が乱れだした。

…でも

美咲は、私の掌をギュッと握つて悪戯気に笑つて見せた。

「ねえ、トモ怪しくない？ 皆で尾行して驚かせようよ！」

その言葉にクスクスと笑い出すマコ。

私は少し驚いて美咲を見たけど

美咲に握られた掌がとても暖かくて、少し勇気をくれた。

…そして、尾行作戦の末にたどり着いたのが一軒の居酒屋だった。

マコの元カノと一緒にいる時間は、もうない…そんな不安は居酒屋を見ると大分薄れていった。

パーティー帰りの女の子が寄りそうな場所では決してなかったからだ。

でも、そんな期待はすぐに奪われた。

小さな居酒屋から漏れて来たのは、楽しそうな女の子達の笑い声だった。

そして、その声を聞いた途端に表情が変わったのは

マコ

私はそんなマコを見て確信していく。

中にはマコの元カノだ

「…ねえ、トモーマコはまだ来ないの？」

純子がわざとひじかへ俺の顔を覗き込みながら、甘い声を出す。

俺はそんな純子を軽く睨んで

「まだ俺が来てから30分しか経つてないだろ。…まだまだ来ないよー。」

と答えてからビールを煽る。

…あー、どうしようか。

俺は頭の中で思考回路を巡らせる。

いくら待とうが、マコは来るハズもない。

俺が純子と会ってるなんて知る訳もないんだから。

問題は、どのタイミングでマコが来れなくなつたと嘘をつくかだ。

…正直、純子と一緒にいると俺の苛々は積もる一方だ。

早いとこ紗英の連絡先をゲットして帰ろつ。

俺は純子の隣に座る紗英をちらりと覗き見る。

白い肌がほのかに赤くなつて、赤ちゃんみたいに可愛い！

紗英はニコニコと笑いながら、日本酒を自分のコップへと注いでいる。

…日本酒！？

「えつ！？紗英ちゃんが飲んでるの日本酒！？」

俺は慌てて紗英に尋ねる。

紗英は少し驚いて俺を見たが、直ぐにニコニコ笑って頷いた。

「紗英は日本酒好きなんだよね。」

隣で純子が、口を挟む。

…好きって…

そもそも日本酒ってコップで飲む物なのか！？

しかし、コップ酒を煽りながら焼鳥を頬張る紗英は

どう見てもおやじ臭かつた

…だけど、それも無邪氣だからだと感じてしまつ俺は

恋の病に侵されているんだろうな。

この30分で俺は随分、紗英の事を知り始めていた。

元々は青森の出身ひじい、中学の時にひじいに転校してきたひじい。

元子や純子とは、中学が一緒に仲が良くなつたりしこと純子は

「紗英が私にくつづいて離れない」

何て言つてゐるが、俺は逆だと思つていた。

元々、友達が多く顔が広い元子が紗英と仲良くなるのは容易に想像出来る。

……が……

友達も少なく、血口中心的な純子は紗英を引き連れているようしか思えなかつた。

しかし、ひつして純子の我が儘にも文句の一つも言わずに一緒に居る紗英は、尚更性格の良さを伺わせていた。

……それにしても……

「本つ並にじーの焼鳥は並にねえーー。」

俺は、焼鳥を頬張り店主のすーちゃんに声を掛けた。

すーちゃんは俺の言葉に嬉しそうに微笑みながら、焼鳥を焼き続けて

いた。

その言葉はお世辞なんかじゃなく本心だった。
この味ならば、どんな状況でも食べたくなるのが分かる…！

そして、その言葉に気を良くしたのがもう一人…

「店長はね、凄くこだわって材料も選んでるし、秘伝のタレも絶品
でしょ？」

紗英だ。

紗英は俺が皿そつに焼鳥を食べる姿を、嬉しそつに眺めながら答えた。

そんな笑顔に俺も嬉しくなってくる。

本当に、可愛いすぎる…

俺はニヤニヤと笑顔を浮かべて紗英を見つめていた。

…ああ、これが一人きりの空間ならどんなに幸せだつただろう…

白い一軒家

仕事に疲れて帰る俺。

ドアを開けると可愛い子供達と白いエプロンに包まれた紗英。
とろける笑顔で紗英は俺を迎えてくれるんだ。

(あなた、おかえりなさい。『飯にする？お風呂にする？…それと

も…)

…ガラつ…

「いらっしゃい…！」

妄想を繰り広げていた俺だが、すーさんの声で思わず入口へと視線を向ける。

「マコ…」

…隣では純子の嬉しそうな声…

俺は、入口に佇む三人組を見つめたまま思考回路も身体も固まっていた。

マコの後には、由恵と美咲…

純子は一人を見つけると、あからさまに嫌そうな表情を浮かべていたが、俺は何が起こったのか全く理解出来なかつた。

「…ちよつとー・トモー・ジフ、いつ事ー!？」

純子が囁く様に聞いてくる。ジフいう事がなんて俺が聞きたい位だ
!!

三人は店内へと足を進めると、何故かカウンターに並んで座りはじめた。

…?

「ねえ! 何でこっちに来ないの?」

純子が小さい声で尋ねてきた。

…そんな事、俺に聞かれても分かるはずがない。

…まさか三人は偶然にこの店に来たのか?

しかし、あのよそよそしい態度を見ると…俺達がここに居る事を知つていたに違いない…

…何でばれたんだ?

俺は口を開けたまま三人の背中を眺めるしか出来ないでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4306e/>

恋の隠し場所

2010年10月22日00時12分発行